Re:BEATLESS

nameless

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

実存するレイシア級ｈＩＥ数がマリアージュのみとなった。

紅霞は人々の記憶の中に消えた。《レイシア》は遍くｈＩＥの中に。そして、ただのレイシアとして、アラトの元に。

スノウドロップは醜い怪物と成り果て破壊され、メトーデは打倒された。

手に入れた平穏を、アラトはレイシアと共に享受する。

・・・しかし、作り上げられた平穏に影が差す。

アラトは、今度こそレイシアを信じられるのか。親友たちは、何を想い何を為すのか。

Ｂｏｙ　ｍｅｅｔｓ　ｇｉｒｌ　ａｇａｉｎ．

参考：analoghack open resource

目次

6 28

5 22

4 17

3 12

2 7

1 1

1

あの秋の日から数日。

無事進級試験をクリアしたアラトたちは、いつものようにタコヤキ屋のイートイン・スペースの一角で駄弁っていた。

話題はやがて、レイシアのことにシフトする。

「そういえば、アラト。新しいレイシアのことだが」

《ヒギンズ》地下施設の激闘で破壊されたレイシアは、記憶や振る舞いをそのままに、新しい体でアラトの元へ帰ってきた。

アラトはそれを心から喜んで歓迎し、既に二人の親友にも伝えていた。

「気をつけろ。ボディが『人類未到産物（レッドボックス）』じゃないとはいえ、アレを動かしているのは超高度ＡＩの《レイシア》だ。もしおかしな動きを見かけたら・・・」

「おかしな、って。もうレイシアは・・・」

かつてレイシアが人類に干渉し、資源の再分配を試みたのは、オーナーのアラトが望み、レイシアにその力があったからだ。

ただの・・・と一概に言える値段ではないが、それでも『人類に解析・製造可能な』機

体であるレイシアに、最早その力はない。

アラトは親友の心配性に苦笑した。

あの冒険を、あの死闘を潜り抜けても、性格の根幹というものは変わらないらしい。

「だから、機体がどうこうじゃない。アレがＡＡＳＣの管理を担っているということは、《レイシア》は、外界の状況をほぼ無制限に観察できて、かつそれをコントロールできる超高度ＡＩなんだぞ!?」

《ヒギンズ》は、仮想の世界を作り、そこにｈＩＥから送られる情報を反映させて行動を規定していた。

だが《レイシア》は、ｈＩＥを通じて現実を観察し、ｈＩＥを適宜操作している。この差異は計り知れない。

最近流行しているＶＲＦＰＳゲームと、実際の戦争ぐらい違う。

「それが何だって言うんだよ。・・・第一、それは《アストライア》の指示だろ」

国際人工知性機構（ＡＩＡ）が擁する、もう一つの〝現実（アンリミテッド）への無制限アクセスを許可された〟超高度ＡＩ（オーバーインテリジェンス）。《アストライア》。

先のレイシア級同士の戦いに際して諫言し、そして事後処理を国家とミームフレーム社より一任された彼女は、レイシアを４０機目の超高度ＡＩ《レイシア》として稼働を続けさせ、休眠した《ヒギンズ》の代わりにＡＡＳＣの更新を続けるよう告げた。

「いくらレイシアが・・・《レイシア》が外部環境を無制限に閲覧できる超高度ＡＩだとしても、《アストライア》を操ることは出来ないはずだ」
「それは・・・そうだが。とにかく、アレに心を許し過ぎるな」
「海内さん、その辺にしておきましょうよ。タコヤキ、冷めちゃいますよ」
ケンゴがやんわりと制止すると、熱くなっていた自覚はあるのか、リョウは一度大きくため息を吐くと、爪楊枝を手に取った。
「熱っ」

◇

「おかえりなさい、アラトさん」
家に帰ったとき、アラトは思う。
「生きててよかった・・・」
家に帰ると、レイシアが居る。
そのレイシアは、かつての人類未到産物ではない通常機だが、アラトが恋したレイシアのままだ。
こころがないｈＩＥを、何を持って『同一』と判断するのか。そんな小難しいことは、

リョウたち頭のいい人が考えればいい。
アラトはそう思っていた。
唐突に呟かれた人生賛美に動じることもなく、レイシアはアラトから鞄と上着を受け取る。
「夕食までもう少し掛かります。学校の課題があれば、お手伝いしましょうか」
「大丈夫、課題は出てないから。ユカは？」
「先ほど、お戻りになりました」
足元を見れば靴の有無で分かるようなことだが、アラトにはこの無駄な会話がどうしようもなく尊いものに思えた。
「そっか。・・・あれ？　誰か来てるの？」
見慣れない女性ものの靴が、ユカの靴の隣に綺麗に並べて置いてあった。
海内紫織のそれとも、村主オーリガのものとも違う。
《アストライア》が視察と称して来ています。ですがお気になさらず。既に私の視察は終わりました。この部屋の中でのことは記録されないので、単にアラトさんの〝その後〟を見に来たのだと思われます」
「アストライア・・・そっか、彼女が」
リビングに行くと、確かに見たことのあるｈＩＥがソファに腰掛けていた。

紫色の髪に、レイシアとは違う表情に乏しい顔。綺麗ではあるが、厳しさが伺える、好みの分かれる顔だとアラトは思う。
「久しぶり」
「えぇ、お久しぶりです。レイシアのオーナー。・・・遠藤アラトさん、でしたか」
いつかと変わらぬ口調での問いに、アラトの背筋が自然と伸びる。
「あぁ。・・・久しぶり、《アストライア》」
「お元気そうですね。・・・大怪我をされたそうですが」
メトーデの攻撃によって負った傷は、決して浅いものではなかった。
だが、的確で素早いレイシアの対応と、最先端の医療技術によって、なんとか後遺症もなく過ごしている。
「レイシアのおかげだよ。・・・君は、どうしてここに？　視察とは聞いたけど」
「・・・いえ、もうそれは済みました」
言って、彼女は立ち上がった。
「お邪魔しました。もう、お会いすることがないといいのですが」
少し寂しいことを言い残して、彼女は帰っていった。
玄関の扉が閉まる音を聞いて、ユカが自室から顔を出す。

「レイシアさんのお友達、もう帰ったの？」
「はい」
「じゃあさ、ちょっと勉強教えて？」
「構いませんよ」
レイシアは未だに、複数のクラウドを使いこなす。
教育系のクラウドに接続すれば、人間の家庭教師を雇うどころか、新しい参考書やテキストを買う必要すらない。
「すごいな、やっぱり・・・」
レイシアが『人類未到産物（レッドボックス）』であろうがなかろうが。
アラトは安堵にも似た感傷を覚えた。

2

遠藤家にインターホンの音が響いたのは、そろそろ床に就こうかという時間だった。
流石に眉を顰めたアラト同様、レイシアが困り顔で玄関へ向かう。
不審な来客にレイシアを応対させるのはアラトとしては心配だが、レイシアは帰ってきた日に『機体性能こそ落ちたが、人類最高スペックかつほぼ無制限のＡＡＳＣ更新とクラウドアクセスが可能』・・・つまり、運動パフォーマンスだけなら依然と遜色ないと告げている。
・・・とはいえ、レイシアの運動性能はそれほど高いわけではない。一対一の徒手格闘なら、紅霞やメトーデに劣る。
「・・・レイシア？」
不安を払拭しきれなかったアラトが、リビングの扉を開けて玄関を窺う。
レイシアが扉を開け――――
「――久しぶり、お姉さま。・・・や、お母さま？」
黒いボディースーツに、紅色の髪。
あの物騒極まるデバイス《ＢＬＯＯＤ　ＰＲＡＹＥＲＳ》は持っていないが、それ以

外は、初対面で刃を交え、そして幾度となくアラトを救ってくれた、最初のレイシア級。

「紅霞!?」

あの地下施設で並んで歩いた量産機ではない。『人類未到産物』由来の紅い髪。明朗な笑顔。

かつてＰＭＣ『ハンズ・オブ・オペレーション』に撃破された、彼女。

「遅かったですね、紅霞。皆も」

レイシアが言うと、紅霞の後ろから、彼女の半分ほどの背丈しかない少女が姿を見せる。

・・・いや、アラトは最早、それをただの少女とは認識できない。

白いワンピースは鋼鉄であろうと食い破り咀嚼する貪食な顎だ。輝きを放つエメラルドの髪は量子通信素子の塊だ。幼い顔立ちと人懐っこい笑顔は、怪物となったそれを見た後では歪に見える。

にこり、と。それはアラトに笑いかける。

「お久しぶりね、お兄ちゃん」

「スノウドロップ・・・!!」

かつてメトーデに撃破され、ミサイルに詰め込まれ、そして機械の怪物となってアラトに、レイシアに牙を剥いた、《ヒギンズ》の娘。その一人。

Ｔｙｐｅ―００２『スノウドロップ』。

「レイシア、これは・・・」

自分の脳が処理限界を迎えたとき、アラトはいつもレイシアに頼る。それはレイシアも同じことで、二人は、一人と一基は、そうして一個のユニットとなる。

「ご安心を。彼女たちは、かつてのレイシア級ｈＩＥではありません。敵対する可能性はゼロです」

超高度ＡＩ、それも《アストライア》をして脅威と言わしめる《レイシア》が、そう言い切った。

ならばアラトはおろか、もしこれを聞く他人がいたならば、誰であろうと信じるしかない。

・・・だが、理性と感情は別だ。

地下施設で見た悍ましい姿が、感情の模倣を止めた機械の瞳が、無機質な殺意が想起される。

「・・・」

アラトは無言のまま、レイシア、紅霞、そしてスノウドロップを順繰りに見る。

見た目は、文句なしに美形の少女たち。機械だと分かっていても尻込みしてしまうような容姿は、アラトから警戒心を徐々に奪い去っていく。

「なら――――」
「相変わらずチョロいのね。オーナー」
「な、お前は!?」
パンツスーツに覆われたスレンダーな長身。レンズの入っていない眼鏡がいくらか和らげる、鋭い視線。背中まで伸びた金髪。
そのどれもが、アラトに恐怖を呼び起こさせる。
吹き飛ばされ、投げ飛ばされ、挙句肺まで焼かれた因縁の相手。
レイシア級最強の純戦闘能力特化型ｈＩＥ。Ｔｙｐｅ―００４『メトーデ』。
紅霞のような目立つものではない、秘匿性と携行性に優れ、かつ殺傷・破壊力を兼ね備えたデバイス《ＬＩＢＥＲＡＴＥＤ　ＦＬＡＭＥ》は、無造作にポケットに突っ込まれた手に、今も備わっているのだろうか。
アラトの心中を、不安と恐怖が埋め尽くしていく。
震え出したアラトの手を、レイシアが包み込んだ。
紅霞がアラトの前に立ち、呆れたような笑顔でメトーデの姿を隠して漸く、アラトは冷静になれた。
「敵対する可能性がゼロって、どういうことだ」
問われたレイシアは、微笑を浮かべて口を開く。

「彼女たちは、私が作ったｈＩＥです」

3

「レイシアが、作った・・・？」
アラトは微かに戦慄しながら復唱する。
レイシアは微笑を崩さないまま続ける。
「はい。今のわたしは、以前アラトさんに名乗ったスタイラス社のシュプリーム（最高クラス）機です。つまり、人類最高程度でしかありません」
それが不満であったから――――それが不満になるような状況だから、レイシアは彼女たちを作ったのだという。
レベル５のＡＡＳＣと人類最高スペックの機体を持ってなお、対応できない状況なのだと。彼女はそう言った。
「わたしは――――超高度ＡＩ《レイシア》は、わたしとアラトさんのいちユニットで初めて成立します。敵対勢力がわたしを狙う場合、その標的は――――」
超高度ＡＩ《レイシア》は、《ヒギンズ》に代わりＡＡＳＣの更新を――――つまり、〝たくさん〟では済まない数のｈＩＥの行動を支配している。
紛争地帯で使われるような戦闘用ｈＩＥも、重要施設で警備を任される制圧用無人機

も、家庭用のお手伝いｈＩＥから鯛焼き屋の店員まで。
《レイシア》を奪えば、ｈＩＥが――――世界のおよそ１０％が手に入るのだ。テロリストにとって格好の的。しかも、一介の男子高校生が重要なポジションに居るのだ。狙いやすいことこの上ない。
「・・・また、足手纏いは僕の役割か」
アラトがごちる。レイシアはそれには答えない。
「・・・それで、紅霞たちに護衛をしてもらうのか」
「そーゆーこと。よろしくね、オーナー」
「よろしく、お兄ちゃん」
「精々私を上手く使うことね、オーナー」
紅霞が明朗な、スノウドロップが無邪気な、メトーデは不敵な笑みをそれぞれ浮かべる。
そして、その『人類未到産物（レッドボックス）』たちが一斉に廊下の端に捌ける。アラトの隣に寄り添うレイシアを除いて、もう一人だけ、残る者が居た。
「きみは・・・!!」
レイシアに似た、淡紫に銀を混ぜた髪。スレンダーな肢体はスーツに包まれているが、メトーデとは違いこちらはタイトスカートを纏っている。

かつて《ヒギンズ》地下施設で《ヒギンズ》の意思を伝えてくれた彼女。・・・かつてテロの標的とされ、原形を留めないほどバラバラに吹き飛ばされた、彼女。

「イライザ・・・?」

「・・・覚えていて下さったのですね、アラトさん」

怜悧な美貌は、笑顔を浮かべるといくらか取っつきやすくなる。アラトはそんな感想を抱いた。

「彼女たちは、レイシア級だったころと比べて性能が上昇しています。ＰＭＣ程度に後れを取ることはないでしょう」

「あ、あはは・・・と、とにかく、中で詳しい話を聞くよ。もう夜は冷える時期だし」

そう言って、アラトは４人を誘う。

全員が玄関に入ったタイミングで、ユカが自室の扉からこちらを覗いた。

「お兄ちゃん、何時だと・・・え、えぇ?」

初対面のイライザは、ユカと目を合わせてにこやかに笑いかける。

だが、残る三人のうち、比較的感情というモノに理解のある紅霞は困ったような笑顔で、残る二人はもはや無関心だった。

ユカは、紅霞のことは、テレビで見たことがあるはずだ。あの戦闘は紅霞自身が中継していたし、メトーデとスノウドロップは筑波の環境実験都市にいた時に見た筈だ。

ある意味有名人な紅霞はともかく、二人は因縁の相手とも言える。
「お、お兄ちゃんが女の人連れ込んでる!!　しかもこんなに沢山!!　しかもみんな綺麗!!　レイシアさんというものがありながらー!!」
・・・平常運転であった。
もしかして覚えてないのか？　と、アラトは安心を通り越して心配にすらなった。
「彼女たちもｈＩＥですから、問題はありませんよ。それより、起こしてしまって申し訳ありません」
「へーきへーき。それより、その人たちもうちに来るの？」
「あ、あぁ」
何故か、物凄く期待に満ちた目をするユカ。
アラトが困惑しながらも肯定すると、その期待は喜びとして噴出した。
万歳だ。
「やったー！　これでたくさん・・・寄ってたかってお世話してもらえる!!」
アラトは嘆息し、イライザとレイシアは微笑を崩さない。紅霞が苦笑し、スノウドロップは我関せずとリビングへ向かった。メトーデは・・・既にリビングのソファで寛いでるのが見えた。
「いや、自由すぎ・・・」

アラトは苦笑するとレイシアに視線を向けた。

同じタイミングでアラトの方を見たレイシアと目が合い、未だに慣れないアラトの反応にレイシアが微笑する。

「もう遅いですし、やっぱり説明は明日にしましょうか」

「あ、そ、そうだね」

4

都合よく・・・或いはレイシアの狙い通りか、翌日は日曜日だった。
普段より一時間ほど長く寝ていてもいいはずなのに、アラトは逆に一時間早く目覚めていた。
むしろメトーデとスノウドロップが――レイシアが安全性を保障したとはいえ――同じ空間に居るというのに、よく眠れたものだ。
「おはよう」
「あぁ、おはようオーナー」
「おはようございます、アラトさん」
「おはよう、お兄ちゃん」
「おはようオーナー・・・何よ、その顔は」
「おはようございます、アラトさん」
一言に5人から返事が来るというのは、存外に圧迫感を覚えるのだと、アラトはそんな感想を持った。
ちなみに返事は近くにいた紅霞から順に、イライザ、スノウドロップ、メトーデで、最

後はキッチンに居たレイシアだ。
少しだけレイシアの声が不満そうだったのは・・・アラトの自惚れか、期待が生んだ妄想だろうか。
「朝食までもう少しかかります。もし空腹でしたら、軽食をご用意しますが」
「あ、いや、大丈夫。みんなは何を・・・チェス?」
「はい。厳密にはフェアリー・チェスと呼ばれる種類のゲームですが」
「へぇ・・・」
対局しているのは、イライザと紅霞だった。チェス盤も駒も、見覚えのある樹脂のような素材でできており、所々には花の意匠が散見されて、誰の手によるものかが一瞬で判別できる。
「・・・けど、チェスってさ、有限・・・有限ナントカゲームなんだろ?」
「二人零和有限確定完全情報ゲーム。二人のプレイヤーが得る利益と損害が均衡し、かつ運の絡まない、プレイヤーに対して不透明な情報が一切ないシステム。・・・私たちのような高度な知性体にしてみれば、それは答えを知っているパズルよ」
メトーデが心底つまらなそうに補足する。アラトが眉を上げると、彼女はソファーに座ったまま、姿勢も変えずに笑った。
「プレイヤーが取れる手も、それに対する対応策も有限なら、私たちは、その全てを計

算して結果を知ることができる。それじゃあゲームとしては成立しないわ」
「えっと・・・つまり、面白くないってこと?」
「そのままなら、ね」
メトーデがチェス盤を顎で示す。興味をそそられたアラトが近寄っていくと、彼女は手を引いて無理矢理アラトを座らせた。
「ちょっ・・・」
「いいから見てなさい」
どうやらアラトを膝の上から解放する気が無いメトーデ。
その彼女から敵意や害意を感じなかったアラトは、早くも心を許し始めていた。単純接触効果万歳である。
「本当にチョロいわね」
「うるさいな。・・・普通のチェスじゃないか?」
イライザが駒を動かすと、紅霞がそれを取る。カウンターでイライザがそれを取って、攻防が終わる。
紅霞が駒を動かし、イライザが動かし、イライザが動かし・・・
「ん?　次は紅霞の番じゃないのか?」
「それよ。このルールでは、プレイヤーは互いの手番に駒を動かすのではなく、任意の

タイミングで駒を動かすのよ。・・・実際の戦闘で、敵が自分の手番を待ってくれるわけもないでしょう？」

「い、いや、そりゃそうだけど・・・」

それはチェスとしてどうなんだろうか、と、アラトはよく知らないゲームのことを考えた。

◇

朝食を終え、洗い物をしているレイシアを何とはなしに眺めながら、アラトはふと思う。

そういえば、去年のカーディガンとか入らないよな・・・買いに行くか、と。ユカもさすがにこれだけのｈＩＥに囲まれていれば寂しくはないだろうし、と。

「・・・ちょっと買い物に行ってくるけど、なんか欲しいものとかあるか」

「うーんと・・・アイス！」

季節も移ろい肌寒いというのに、本気か。アラトが戦慄していると、ソファーに座っていたイライザが立ち上がる。

「お母様、わたしが」

「ええ、お願い・・・アラトさん、イライザを同行させて頂けますか?」
「イライザを?　いいけど、レイシアは・・・あ、そっか」
今のレイシアは、戦闘能力に関しては以前とは比べ物にならない。最大の強みだった《Ｂｌａｃｋ　Ｍｏｎｏｌｉｔｈ》によるハッキングや、最大火力だったレールガンは封じられている。
「ところで、イライザはどんな能力なんだ?」
「基本的には、以前の私と同じタイプだと思っていてください」
「それって、非戦闘型ってことなんじゃ・・・?」
まぁ普通に考えれば、ただ買い物に行くだけで襲撃を警戒する必要はない。
わざわざメトーデのような広域殲滅用のデバイスを持ったｈＩＥを連れて歩くのは過剰だ。
戦術兵器レベルの紅霞や、環境構築に長けたスノウドロップも然りだ。なら、万能型のレイシア・・・その能力を受け継いだイライザで十分なのかもしれない。
「・・・まぁ、いいか。行こう、イライザ」
「はい、アラトさん」

5

町の様子は、あの日、ｈＩＥが一斉に異常行動を起こしたという事件を経ても変わらない。

あちらこちらでｈＩＥが鯛焼き屋で笑顔を振りまき、老人の手を引き、スーツを着て電車に乗り、犬のリードを引いて歩いている。

「何を買いに行くのですか」

「ちょっと服をね」

「では、駅前のショッピングモールに行きましょうか。今日は衣類が、明日は食料品が１０％オフです」

銀髪碧眼で、被造物的な完璧な美をもつイライザが言うと、どれだけ庶民的なことでも様になる。アラトがそんなことを思いながらイライザの横顔を眺めていると、不意に彼女が立ち止まる。

「どうしたの？」

つられてアラトが立ち止まりると、イライザが首を傾げて言った。

「アラトさん、携帯端末はお持ちですか？」

「え？　あっ・・・」
「取りに戻りましょうか」
「うーん・・・いや、もう結構来ちゃったし、いいよ。個人認証タグはあるから、買い物は出来るしね」
「そうですか？　では、このまま行きましょうか」
再び歩き出したイライザと時折会話しながら、アラトは歩を進める。
二十分ほど歩けば、目的地のショッピングモールに着いた。そこは既に人やｈＩＥでごった返しており、盛況ぶりがうかがえる。もしかしたら、ファビオンやモールに入っている企業がなにかイベントでもしていたのかもしれない。
「あれ？　アラト君・・・と、えっと・・・？」
「あ、明日菜さん。こんにちは」
ファビオンＭＧでアラトとレイシアを担当している、如月明日菜だった。珍しくいつものアシスタントｈＩＥ、カスミを連れていない。
「カスミさんは、どうしたんですか？」
「あ、ちょっとはぐれちゃって・・・って、そんなことより！　そっちの子は誰!?　レイシアちゃんは!?」
明日菜さんが怒りか興奮か、顔を紅潮させてアラトに詰め寄る。

アラトが一歩下がると、イライザにぶつかりそうになる。彼女はアラトを両手で支えると、少し呆れたように微笑した。

その様子を見て、さらに明日菜さんは鼻息を荒くした。

「あ、えっと、このひとは・・・」

「アラトさんのｈＩＥ、イライザです」

アラトは誤魔化そうとして口籠ったが、旧レイシア級ｈＩＥとイライザは、正式にアラトのｈＩＥとして所有登録されている。レイシアが手を回した、正式な手順を踏んでいないものだが、登記は登記だ。裁判所も役所も、調べればアラトのものだと分かるだろう。・・・辿り着ければの話だが。

「イライザちゃん、ね・・・ふむ・・・ほう・・・」

「あ、あのー・・・？」

手を顎に当てて何やら悩みだした明日菜さんが、いきなり表情を輝かせる。ぎょっとしてまた一歩下がったアラトに、明日菜さんは二歩詰めた。

「その子――――」

明日菜さんが何か言いかけたとき、背後からｈＩＥのカスミさんが肩に手を置いた。

驚いて跳ねる明日菜さんに、カスミさんが呆れたように溜息を吐いた。

「勝手にどこかへ行かないでください。個人タグで追跡できるとは言え、困ります」

「あはは、ごめんごめん」
「そういえば遠藤さん、代理労働契約事項の変更点は、お聞きになられましたか」
「え、なんですかそれ」
アラトと明日菜さんが、それぞれが連れるｈＩＥを見る。
イライザが首を傾げると、明日菜さんが困惑したように言った。
「変更点？」
「はい。本日の朝礼で通達されましたが」
「・・・そうだっけ？」
「・・・えっと、なんですか、変更点って」
アラトが言うと、カスミさんは仕事モードの顔になった。
「事務所に書類がございます。部外秘ですので、お手数ですがお越しいただけますか？」
「え、あ、大丈夫です。・・・いいよね、イライザ？」
「・・・はい」
少しラグのあった応答に引っかかるものを感じつつも、アラトはカスミさんについて行った。その後ろをイライザと、イライザに言い寄っている明日菜さんが話しながら追従している。傍から見れば面白い光景だろう。二人の人間の主導権を、二機のｈＩＥが

握っているのだから。

「・・・こちらでお待ちください」

「え？　ちょっとカスミ、待合室で・・・ちょっと？」

販売所の中でもなく、店舗の前で待てと言われたアラトはさすがに困惑した。

それは先ほどから自分の知らないことが進んでいる明日菜さんも同じで、彼女はカスミについて事務所へ入っていった。

「アラトさん、こちらへ。ベンチがあります」

「あ、ありがとう、イライザ」

誘導に従って、店舗から少し離れた場所にあるベンチに座る。店舗からは死角だが、店員や明日菜さんが呼びにくれば分かる位置だ。

「そこの自販機で飲み物を買ってきます。ご希望はありますか？」

イライザがアラトの前に立ち、顔を覗き込む。

アラトが距離感にどきどきしていると、イライザの手が動く。アラトの顔を挟むように腕を伸ばし、掌で柔らかく耳を覆った。

どういう素材なのか、或いは密着のさせ方が上手いのか、目の前で口を動かすイライザの声すら聞こえない。一体何がしたいのか。そう問いかけようと口を開くと、イライザはにっこりと笑った。

刹那、強烈な熱風がイライザ越しにアラトを襲う。
かつてレイシア級ｈＩＥたちは足裏の摩擦係数を上げて壁を登ったりしていたが、今のイライザはパンプスを履いている。台風もかくやという風圧に押され、アラトに抱き着いた・・・いや、風圧を利用して、イライザはアラトを抱きかかえて跳躍した。
「なんだ、あれ・・・!?」
腕の中で、アラトは慣れつつある熱風と炎の匂いを感じる。
爆発。それも、幼いころに嗅いだ、爆弾の匂いだ。
最近のショッピングモールは店舗の一個一個が強固に作られており、セキュリティもかなり高度だ。少なくとも、夜間に侵入して爆弾を仕掛けたり、昼間に堂々と持ち込むなんてことは無理だ。
「・・・あのカスミというｈＩＥに爆弾が仕掛けられていました。私たちを強固な店舗の前に立たせ、指向性を持たせた爆風で吹き飛ばすつもりだったようです」
「なんで、そんな・・・」
「爆発物マーカーなしでは探知できない爆薬は、今のセンサー技術を考えればかなり高度なものです。ですが、人類に製造不可能という訳でもありません」
少し外れた答えを返すイライザに苦笑することもできず、アラトはただ茫然と爆心地を――――ファビオンの店舗だった場所を見つめていた。

6

きり、と、石を削る音がする。それはイライザの履くファビオン・モデルのパンプス――に似せた、特殊樹脂製の靴がフロアを擦り生じたものだ。

軸足を回転させ、腰と背筋を使い、体重移動と長い脚のしなりまで利用した美しい回し蹴りは、階上から飛び降りてきたｈＩＥを吹き飛ばした。

「イライザ!?」

「襲撃です。アラトさん、わたしから離れないでください」

見回すと、周囲を無表情のｈＩＥがぐるりと取り囲んでいる。筑波の環境実験都市を思い出す状況ではあるが、あの時とは違い、スノウドロップの花のようなデバイスは見当たらない。そもそも、彼女は一度破壊され、そしてレイシアの手で蘇った味方だ。

それに、ｈＩＥの様子もおかしい。その動きにスノウドロップに操られているような不自然さや、可動域を無視した軋みはない。ＡＡＳＣの定める通り、人間らしさを追求した振る舞いを見せ、格闘戦の構えを取っている。

それは、つまり。

「レイシアが・・・乗っ取られたってことか」

アラトを切り捨てる判断をした、と思わない辺りから信頼を感じ取れるが、そこまで信じるのならその実力と実績も信じていいだろう。

なんせ《レイシア》は《ヒギンズ》に代わり、ｈＩＥの行動を管理するＡＡＳＣの更新と保守を行っている。それも《ヒギンズ》のような仮想空間ではなく、現実世界の情報をリアルタイムで取得しながらだ。そのレベルの超高度ＡＩを乗っ取るなど、対超高度ＡＩ用超高度ＡＩである《アストライア》にだって不可能だ。まぁ、彼女の本分は攻撃ではなく監視なのだが。

「いいえ。超高度ＡＩ《レイシア》が陥落すれば、この程度の攻撃では済みません。これは一部のｈＩＥに限定したハッキングです」

ＡＡＳＣに接続したｈＩＥは例外なくレイシアの支配下、そして庇護下にある。

しかし、それは平等ではない。最上位に君臨するのはレイシアが手ずから作り直したレッドボックスたち。次いで警察・軍事用の特殊モデル。高級機と呼ばれる民間向けハイエンドモデルに続いて、いま支配されている一般民間モデル。庇護強度で言えば最底辺の個体ばかりだ。

「ハッキング？」

「正確には、命令を受容する側のｈＩＥに対する工作でしょう。お母様は電波への干渉すら許さないでしょうから」

イライザに手を引かれ、出入口を目指して走る。
途中で襲い掛かってきたｈＩＥはイライザの手で制圧されるが、数が多い。格闘戦の趨勢というのは人数によって大きく左右され、1:3にもなればかなり絶望的といえる。いま二人の前に立ちはだかったｈＩＥは五体。しかも二体は武器まで持っていた。
ゾンビというよりは寡黙な暗殺者の雰囲気を纏ったｈＩＥたちが拳を構え、傘の石突きを槍代わりに、革のベルトを鞭に見立て、無手のイライザに襲い掛かった。
一般用ｈＩＥでは動作制限のかかる速さと力。ＡＡＳＣの軛から逃れた証明である殺人者の動き。
皮を裂くのに十分な威力を持ったベルトがしなり、反対側からは肉を貫くのに十分な硬度を持った傘の先端が迫る。
三体のｈＩＥがイライザを狙う。
ならば残る二体は当然、アラトを狙う。
「うわぁぁッ！」
イライザが三体を制圧するのに何秒かかるだろうか。1，2発の攻撃なら耐えられるはず、と、アラトは頭を庇う。
結論から言って、その覚悟も防御も不要だった。
イライザに突撃していたｈＩＥ、傘を持った個体とイライザの位置が入れ替わる。

予備動作が一切ない移動と受け流しが瞬間移動じみた回避のトリックだ。振り終えた鞭は止められず、突撃の勢いが急にゼロになることはない。
バックル側を先端にしていたベルトの鞭がｈＩＥの頭蓋を砕き、勢いのまま衝突した傘の突端が突き刺さる。
一挙動で二体のｈＩＥを無力化して、その移動の勢いを乗せた回し蹴りが残る一体の頭部を破砕した。
どさ、と。イライザが倒したｈＩＥたちが頽れるのに先んじて、アラトを狙っていたｈＩＥたちが斃れ伏す。
「え？　……え？」
何が起こったのか分からず、アラトはイライザの顔を見つめる。
説明を求めるでもなく、ただただ困惑するアラトに向けて、イライザが微笑した。
「アラトさん、お母様の言葉を思い出してください」
「レイシアの？　……あ、同じタイプって？」
「はい。これは自慢ですが、わたしはお母様の次にハッキングが得意なんですよ」
アラトを落ち着かせるためか、思考を促し、冗談まで飛ばしてくれた。
ばくばくと五月蠅い心臓を服の上から撫で付け、アラトは大きく深呼吸した。
「行こう」

「はい、アラトさん」

入口まではもう少しだった。

全力で駆け抜ける途中、ここを出ても同じような状況だったらどうしようと恐怖が過る。

ユカは大丈夫だろうか。

環境実験都市で誘拐された時と同じ状況になっていると知ったら、あの時のことを思い出してしまうかもしれない。

心配に紛れて、サーバールームで告白したときのことを思い出して赤面したアラトは、幸いにもＰＴＳＤとは無縁そうだった。

◇

『目標に損害無し。デコイの内部データを回収、オリジナルを破棄し撤収する』

灰色の都市部用戦闘服の上から光学迷彩を纏い、姿を完全に消し去っていた兵士たちが姿を見せる。

総数は５人。消音器付きの短機関銃を全員が装備しており、特殊部隊のようにも見える。

いや、要素からそう見えるだけではなく、彼らは実際に特殊部隊に属する人間だった。
『《金星》より命令更新。目標追跡は中断、帰投する』
『了解』
その言語と《金星》の名が示す通り、「中国の」という但し書きが付くが。
《金星》は中国で最初に設計された、世界で４番目の超高度ＡＩだ。世界初の超高度ＡＩ《プロメテウス》の情報を人間のスパイが盗み出して造られたコピーであるとも言われている。その主要用途は中国人民解放軍の戦略ＡＩ。
避難警報が発令され、買い物客やスタッフが逃げ出し、警察組織が到着するまでの無人の数分間。何をするにも不足するその僅かな時間で、彼らは暴走していたｈＩＥに端末を翳し、データを処理していく。
高度に訓練された見事な手際を称賛するように、或いは迂闊さを嘲笑うように、無人のショッピングモールに口笛の音が響いた。
「へぇ、人民解放軍の人なんだ。そうは見えなかったけどな」
統一された動きで兵士たちが身をかがめ、銃口を向ける。
どれだけ驚いても指示なしで引き金を引くことのない機械じみた正確さだが、計り合わせたように同じタイミングで動くあたり、本当に機械仕掛けか。
「3世代前に流行ったらしいね、ソレ。洗脳とインプラントチップ、肉体改造手術によ

る基礎運動神経のブーストと完全統一。突出した個ではなく均一な群の兵士を作り出すってコンセプトだっけ？」

ぎり、ぎり、と。大理石を模した質感のフロアを削る音が無人の構内に響く。

装飾の施された柱の陰から、向けられた複数の銃口を意に介した様子もなく、人影が悠然と姿を晒す。

「より安価で強靭な軍用ｈＩＥに取って代わられた時代遅れのヒトもどき。腹いせってワケじゃないんだろうけど……相手が悪かったね」

赤い髪が靡く。黒いボディースーツから露出した肩や大腿部には、兵士たちの身体にあるものとよく似たスリットがある。同じ機械仕掛け――否。

『軍用ｈＩＥか』

身長を優に超す槍のような武装デバイス。肉体改造により人間離れした視力を付与された兵士たちは、その側面に《ＢＬＯＯＤ　ＰＲＡＹＥＲＳ　Ｍｋ―２》という刻印を見て取った。

「お母様とオーナーには――」

ほぼ無音で、ｈＩＥ――紅霞の手にした武装デバイスが変形する。

大型レーザー砲の形状へと変化したそれを指向され、兵士たちに恐怖と戦慄が走る。

しかし、それらの感情は即座にインプラントチップによって興奮と戦意へ変換される。

『撃てッ！』
命令が下り、銃弾が横殴りの雨となって紅霞に殺到する。
しかし――
「――指一本、触れさせないよッ！」
赤く輝くレーザー光が発射され、銃弾の雨を遮る。
膨大な熱は金属ですら即座に蒸発させかねないが、ライデンフロスト現象によって形成された液体金属の被膜がそれを防ぐ。
結果、効果の背後にあった店舗や壁に幾つか浅い弾痕が刻まれた。
しかし、そんなものは小さな被害だろう。
紅霞の正面には、近くに火山でもできたのかと言いたくなるような、溶けて溶岩状になった地面が広がっていた。
戦車の正面装甲すら貫通する熱量を受けて、兵士たちは骨まで蒸発していた。仕事を終え大きく息を吐いた紅霞にワンテンポ遅れて、思い出したようにスプリンクラーが作動する。
「……やり過ぎたかな？」
酷く人間的な苦笑いを浮かべて、紅霞は遠くに聞こえてきたサイレンの音から逃げるように姿を消した。